

「昭和の町」による地域活性化

——豊後高田市——

研究員 古江晋也

1 衰退した商店街

大分県豊後高田市にある8つの商店街は、昭和30年代（1955～65年）まで「国東半島一」ととなえられるほどの活気があり、地域の商業を担ってきた。しかし、郊外型大型商業施設の進出、過疎による後継者不足などによって商店街は凋落^{ちやうらく}の一途をたどった。1965年には、宇佐参宮鉄道が廃線となったことでさらに拍車がかかり、商店街は「犬と猫しか通らない」「シャッター通り」と揶揄^{やゆ}されることもあった。

こうしたなか、地元商工会議所が中心となり、地域商店街の活性化の模索が始まった。80年代ごろからは町おこしイベントが行われるようになったが、継続的にぎわいを取り戻すには至らなかった。そこで90年代後半からは、資金を掛けずに中心市街地を活性化する昭和の時代を髣髴^{ほうふつ}とさせる「レトロモダンな街なみ」とした町づくりを開始。行政側も2000年ごろから本格的に事業のバックアップを行った。

2 「昭和の町」の概要

1960年代、全国の商店街の多くはアーケードの取り付けや舗装工事が実施された。しかし、豊後高田市の商店街は、昭和30年代から手が加えられていなかった。このような店舗は同商店街全体の7割にも及んでおり、逆にこの現状を生かして昭和30年代の雰囲気との再現を再生事業の中核に位置づけることとした。



（写真1）「昭和の町」の街並み

まず、商店街を昭和の街並みとするためにパラペット等を取り外し、従来の看板や建物本来の姿を見せるようにした（「建築の再生」）。そして各店舗は、昔から使用していた道具や店舗に伝わるお宝などディスプレイすること（「歴史の再生」）や自慢の商品の販売を行うこと（「商品の再生」）で店舗の存在感を示すようにした。加えて、観光地にしばしば見られる強引なセールスを行わず、観光客との「会話による商い」を重視すること（「商人の再生」）で古き良き昭和の雰囲気を一層高めることにした（写真1）。

一方、豊後高田市は当時の富豪の米蔵であった旧・高田農業倉庫を取得。それを展示施設「昭和ロマン蔵」に改装し、商店街の中心的施設とした。「昭和ロマン蔵」は、「駄菓子屋の夢博物館」（02年）・昭和の絵本美術館（05年）、「レストラン旬彩南蔵」（06年）、「昭和の夢町三丁目館」（07年）で構成されているが、当初、このなかで特に集客力を発揮したのが「駄菓子屋の夢博物館」であった。



(写真2) 駄菓子屋の夢博物館

「駄菓子屋の夢博物館」(写真2)は、現館長の小宮裕宣氏のおもちゃコレクションの展示を行っており、当時遊んだ経験にある団塊の世代やおもちゃコレクターなどに絶大な支持を得た。同施設が開設された翌年には20万人が訪れるようになった。また、07年に開館した「昭和の夢町三丁目館」(写真3)では、昭和30年代の民家の再現などを行っており、観光客は展示物に直接触れることが大きな特色となっている。

3 「昭和の町」のマーケティング

「昭和の町」が全国的に知られるようになった要因には、商工会議所や市役所などのたゆまぬマーケティング活動に注目する必要がある。01年ごろからは、隣接する福岡県などに対する市長のトップセールスに加えて、テレビからミニコミ誌にいたるまでの媒体を活用して知名度を高める努力を行った。これらの努力が実を結び、03年には福岡県のバス会社のツアーに「昭和の町」が組み入れられるようになった。また、著名人がメディアで「昭和の町」を取り上げたパブリシティ効果も知名度の向上につながった。



(写真3) 昭和の夢町三丁目館

4 博物館から商店街へ

「昭和の町」に大きな集客力が生まれたきっかけは観光客の大半が訪れる「駄菓子屋の夢博物館」の開館であった。しかし最近では、観光客は商店街の散策のほうを楽しむようになりつつある。これは、商店街が充実してきたためにほかならない。「昭和の町」によって、かつて廃業した店舗が、商いを再開させたり、他の都市から移り住む個人事業者も見られるようになった。

昭和をモチーフにした博物館やテーマパークは数多い。こうしたなかで「昭和の町」は、商店主・店員と観光客のコミュニケーション、直接触れることのできるオート三輪など、経験価値を高めることに努めてきた。このことは他の施設との差異化にもつながる。また、最近では商店街を目当てとしたリピーターも増加しつつある。

豊後高田市「昭和の町」は、地域が少子高齢化等によって厳しい状況にあるなか、観光客誘致による商店街の生き残り戦略としても注目できる。

(ふるえ しんや)